

当時の政令がまず東京、京都、大阪の三府に布達して後、他の県に通達する情勢から、次々と県立病院で病院内医業分業が始まる基となった」

長与専齋らが欧米を視察してまず東京、京都、大阪の三府に布達した毒劇薬取締（明治七年九月）、医制（明治七年八月）より一ケ年以上も前に、一人のオランダ人医師エルメレンスの指導により大阪府病院では近代的な病院運営が行われていたことは驚嘆に価する。

帰国したエルメレンスは明治一三年二月一日南仏旅行中客死し、その報を悲しみ府民有志は醸金して中之島公園に巨大な記念碑を建てて彼の徳を称えた。今、碑は中之島の大阪大学医学部玄関前にある。

（元大阪帝国大学医学専門部・奈良佐保女学院短期大学）

明治初期の翻訳育児書

小嶋 秀夫

家庭向けの子育ての書に関する限り、明治以前のわが国には、西洋の直接的影響は僅かであった（Kojima, 1986）。筆者は八十五回総会において、江戸期の一般向けの子育ての書が幼い子どもをどのような存在にとらえ、どのように取り扱うべきだとしたかをまとめて報告した。そこには、素朴なものだが児童発達理論というべきものが存在していた。

では、その「理論」の明治維新後における連続性と変化はどうであろうか。社会組織が変わり、国家や個人々の目標が設定し直され、さらに、欧米の育児法に関する情報が流入してくると、当然、育児についての考えや方法にも変化が出てくると考えられる。西欧の理論と方法を摂取する過程の中で、従来の「理論」はどのように機能したのであるろうか。江戸期の子育て論者たちが中国の理論や方法を取

捨選択したように、明治期においても、外来の理論と方法を鵜呑みにはせず、取捨選択をし、また同化を図ったものと考えられる。

その過程を解明する手はじめとして、明治初期になされた西欧の育児書の翻訳を検討する。ここでは、一八七〇年代後半から暫く盛んに行われた育児書の翻訳のうち、初期のもの三つを（とくに①を中心に）紹介する。

①ゲッセル著・村田文夫訳『子供そだて草』

明治七年一月の序がある絵入り木版本（汪彫椶、玉山堂。

愛古堂）で、明治維新後最初の翻訳育児書とされている。

原著者は、ゲッセルならぬゲッチェルである（Getchel, F.

H. Maternal management of infancy. Philadelphia: Lippincott,

1868）。ゲッチェル（一八三六～一九〇七）は、アメリカのメ

イン州で生まれ、ダートマス大学で医学教育を受けた人で

ある。産婦人科・小児科を中心とした診療活動をし、フィ

ラデルフィア医師会の会員であった。訳者の村田文夫（一

八三六～一八九一）は、広島藩の藩医の野村家に生まれ、緒

方洪庵の門に学んだ。藩から命じられ長崎に赴くうちに、

洋学導入の必要性を感じ、英学を修めた。さらに、イギリ

ス商人の斡旋を得て藩命を得ずに英国に脱走し、およそ四年を経て一八六八年に帰国したところ、藩の洋学教授に任ぜられた。かれは『西洋聞見録』（一八六九～一八七〇）を著し、一時、明治政府に出仕した。上記の育児書の翻訳は、その期間中に行われた。後に官を辞し、『園々珍聞』を発刊した。

上記の翻訳は一部に誤りを含むものの、全体として正確である。人工栄養法の注意など有用な情報も含まれている。半面、わが国では無意味というよりも有害な注意（這い這いの抑制など）も、そのまま訳してある。また、原著にはない挿絵が入っているが、それは完全に日本的な絵である。たとえば産湯は、原著の内容（翻訳も不正確であるが）とは関係なく、在来のやり方が描かれている。専ら、親しみ易さを増すための挿絵だといえる。

さて、緒方惟準が寄せた序文にも反映されているように、欧米人に劣らぬアジア人になるためには、幼い子どもの取り扱いの改善が必要だという認識が、このような翻訳書の出版の一つの大きな動機だったと思われる。

②クレンケ、ハルトマン著・近藤鎮三訳『母親の心得』

上・下 訳者蔵版 明治八年

これも、中村正直の序文にあるように、一国の文明の基礎を形成する上で、母親の役割が重要だという認識に基づいた翻訳である。原著者二人はドイツの医師である。上巻は訳者が「ハルトマン氏の養生説」と記したものを扱っているが、Hartmann, F. (一七九六～一八五三)の著書の一部を指しているのかも知れない。下巻はクレンケ (Klencke, H., 一八一三～一八八一) の *Die Mutter als Erzieherin ihrer Töchter und Söhne...* (Leipzig: Kummer, 初版一八七〇年) の一部分の抄訳である。訳者の近藤鎮三 (一八九四年没) は、幕府の洋書調所 (開成所) の教員、岩倉使節団の随行人員、文部省の御用掛などを務めた初明のドイツ語学習者の一人であり、この翻訳を出版する前後からの八年間、文部省の『教育雑誌』にドイツの教育論文の翻訳を多く寄せている。しかし、後には司法省 (翻訳課) に移り、検事となった。

③パイ・ヘンリー・チャアス著・沢田俊三訳『智巴士氏育児小言』初篇一・二 気海楼 明治九年

松本順関のこの翻訳は、Chavasse, P.H. (一八一〇～一八

七九) の問答式の著書 *Advice to a mother...* (12th ed., London: Churchill, 一八七五) によったもので、原著者はイギリスの医師である。初篇は育児と子どもの病気を扱っている。訳者の沢田俊三 (一九〇九年没) は、武蔵忍藩の洋学校二等教授を経て、一時、明治政府に出仕。その間にこの翻訳をしたものと思われ、後には判事補、弁護士を務めた。

これら初期の翻訳書の多くは、子どもの身体的取り扱いを越えて、しつけと教育の問題に踏み込んでいる。これらと併存した在来風の本や、後に現れる日本人による育児書との関係も検討して行きたい。

(名古屋大学教育学部)